

さつ ま ぎ し

きずな

— 薩摩義士が結ぶ交流の絆 —

鹿児島・岐阜姉妹県交流



木曾三川公園センターの展望台から治水神社^{ちすいじんじゅ}と千本松原を望む（岐阜県海津市^{かいづ}）

鹿児島県

姉妹県盟約

鹿児島県と岐阜県は、宝暦年間（江戸時代中期）に木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）の治水工事を完成させた薩摩義士の偉業を縁として、両県の市町村や各種団体による交流が活発化するなど、両県の友好的な関係が拡大・進展していったことから、昭和46年7月27日に姉妹県盟約を締結しました。



姉妹県盟約確認書署名の様子
(平成23年5月24日：鹿児島市)

姉妹県盟約40周年

平成23年は鹿児島県と岐阜県が姉妹県盟約を締結してから40周年の節目の年でした。

5月24日には鹿児島県で、11月7日には岐阜県で記念式典が開催されました。

また、薩摩義士の偉業やこれまでの両県における様々な交流などについて紹介する「パネル展」も県内外で開催されました。



姉妹県盟約確認書

鹿児島県と岐阜県は、宝暦年間に木曾三川の治水工事を完遂した薩摩義士の偉業をたたえ、その精神的な絆をもとに両県民の総意により昭和46年7月27日姉妹県としての盟約を結びました。

以来、教育、文化、経済などの交流を通じて数多くの成果をおさめてまいりましたが、ここに40周年を迎えるに当たり、今後さらに友好を深め、両県の発展に寄与することを確認いたします。

平成23年5月24日

鹿児島県知事

岐阜県知事

伊藤 祐一郎 古田 肇

「宝暦治水」を知る①

姉妹県盟約のきっかけとなった「宝暦治水」を知っていますか？

幕府からの命令

1753(宝暦3)年に濃尾地方を襲った大洪水のあと、幕府は美濃から1200kmも離れた薩摩藩に、幕府直営の大がかりな河川改修工事のお手伝い普請(※)を命じました。この治水工事は、河川の氾濫をおさえるとともに、外様大名の筆頭である薩摩藩の勢力を弱めるという目的もありました。

当時、既に多額の借金があり財政が逼迫していた薩摩藩では、命令を断り幕府と戦うか、命令に従い借金を増やすか苦渋の選択を強いられました。しかし、薩摩藩家老であった平田鞠負の「苦しんでいる人々を助けるのも仁義を尊ぶ薩摩武士の本分」という言葉に後押しされ、治水工事を引き受けることになったのです。

※幕府が命じた工事のことで、名目はお手伝いとなっているが、実際は、工事費用のほとんどを藩側に負担させるものであった。



木曾三川とは・・・

美濃と尾張にまたがる広大な濃尾平野を流れる木曾川、長良川、揖斐川。

木曾三川と呼ばれるこの三大河川が合流する岐阜県南部は、宝暦年間の治水工事により堤防が完成するまで、大雨のたびに至る所で堤防が破壊され、低地はことごとく浸水を繰り返すなど、長年水害に悩まされ続けていました。



上/宝暦治水の工事箇所(赤丸内)

左/幕府からの命令を受け、工事を
行うべきかどうか議論する薩摩
藩士らの様子

「宝暦治水」を知る②

困難な治水工事

総奉行に任命された平田靱負ほか、途中の交代要員や追加派遣を含め、最終的に約千人の藩士が挑んだ難工事は、大きく春と秋に分けて行われました。工事の設計や工事現場の監督などは幕府が行うのに対して、工事にかかる費用の大部分は薩摩藩が負担するものでした。

1754（宝暦4）年2月に春の工事が始まりましたが、当時薩摩藩には治水工事の専門家はほとんどおらず、また、幕府や地元の人には鹿児島弁が通じない不自由さに加え、初めて耳にする河川用語に戸惑うなど、5月下旬の春の工事終了まで困難続きでした。

秋の工事が始まるまでの間も、幕府の役人たちは江戸に帰っていましたが、薩摩の人々は国に帰ることが許されず、秋の工事に向けた大量の資材集めや運搬に奔走していました。また、この間にもしばしば洪水が起こり、そのたびに復旧作業に呼び出されたり、予定になかった支出が生じるなど、苦難が続く日々の中、病死する者や自ら命を絶つ者など犠牲者が相次ぎました。

秋の工事は9月下旬に始まりましたが、大規模な難工事に加え、途中で大きな計画変更などで春の工事以上に過酷なものになりました。



上／濃尾平野を流れる現在の木曽三川の様子
（写真提供：（社）岐阜県観光連盟）



左／宝暦治水碑
（海津市：千本松原の南端）



右／平田靱負像
（鹿児島市：平田公園）

工事の完了

1755（宝暦5）年3月下旬にすべての工事が完了し、同じ年の5月に幕府の検分を終えました。

検分を終え、国もとへ工事完了の報告をした翌日の5月25日、平田鞠負は切腹し、52年の生涯を閉じました。

多くの犠牲者を出したことで、約40万両（現在の金額で約300億円以上）という多額の費用を使わざるをえなかったことに責任を感じての死だと言われています。



治水神社（海津市）
宝暦治水工事の責任者である平田鞠負がまつられています。昭和2年の着工以来、実に10年の歳月をかけて完成しました。毎年春と秋に義士の功績をしのび顕彰式が行われています。

工事のその後

岐阜県では、この時の工事によって完成した堤防により洪水に苦しむことが少なくなったことを大変喜び、工事に従事した薩摩藩士を薩摩義士（薩摩様）と呼んで感謝したと言われています。

しかし、鹿児島では、多数の犠牲者を出したことや膨大な予算を使わざるをえなかったことに責任を感じ、関わった薩摩藩士や子孫たちも工事について語ろうとしなかったため一般に知られることはありませんでした。

薩摩義士について公に語られるようになったのは、大正5年に平田鞠負が従五位を贈位された頃からだと言われています。その後、鹿児島でも薩摩義士や、薩摩義士が行った宝暦治水工事への関心が高まってきました。

このような「宝暦治水」での結びつきをきっかけに、昭和46年に鹿児島県と岐阜県との間に姉妹県盟約が結ばれました。盟約を結んで40年、行政レベルから民間レベルまで多岐にわたる交流が盛んに行われています。

岐阜県内での取組

現在でも岐阜県では、薩摩義士の偉大な業績と崇高な精神が連綿と語り継がれ、広く顕彰されています。

また、副読本で薩摩義士の偉業を取り上げて学習する小学校があるなど、両県の絆の歴史を大切にしています。